愛媛県新居浜市、別子銅山跡地巡り。

二〇一五年九月二十一、二十二日。

※この記事内での資料館やマイントピア別子、及び銅山跡地の内容は、愛媛県立新居浜南高等学校ユネスコ部の学生の説明を録音し、紀行文用にリライトいたしました。また東平娯楽施設等、説明が重複した場所がありましたので、それらは最初の説明のみを書き、二度目は割愛いたしました。

一日目。東平歴史資料館、マイントピア別子。

別子銅山は一六九〇年（元禄三）に別子山中で発見され、住友家による別子銅山請負稼行が幕府に認可され、江戸時代の銅の産出量は世界一の規模をほこった。以後一九七三年（昭和四八）の閉山まで二八三年の長きにわたって採鉱が行われ産業の近代化を築いた鉱山として世界的に知られていた。その跡地は貴重な近代産業遺産群となっており、その遺産群は新居浜市、四国中央市、または今治市など東予全体にまたがっている。

二〇一四年十月か十一月頃、偶々ある旅ブログで愛媛県にある別子銅山に関する記事を読んだ。私はそれまでは別子銅山についての知識は無かった。だが、それを読んで、引き込まれてしまった。「東洋のマチュピチュ」というフレーズにもひかれた。そのブログの中で、その年の十二月に東京で「別子銅山展」が開催されることが書かれていた。是非行ってみようと決心した。

東京での別子銅山展に行った日は大雨の肌寒い日だった。単にパンフレットや観光紹介などの小規模なものだろうと思って行ったが、そうではなかった。それから、東京では余り知名度がなさそうだから、人も来ていないだろうと思ったが、それもあてがはずれた。土曜日だったせいもあり、雨なのにかなり人が来ていた。地元新居浜南高校ユネスコ部の生徒と顧問の河野氏と別子銅山の説明があった。彼らがずっとこの別子銅山の宣伝を地元のみならず、他県でも行い、宣伝し、元従業員への取材、ユネスコへの宣伝など、活動の一部が紹介された。彼らの熱気あふれる話を聞いて、ますます行ってみたいベクトルが増したと同時に、最近の若い人たちへの見方が変わるきっかけにもなった。

ほんの少し話を聞いただけだが、彼らは皆面目だった。彼らの作ったホームページも紹介された。

それ以来、私は別子銅山について資料を集めたり、ホームページを読んだりした。いつ頃訪問しようかと考えたが、二〇一五年の九月は大型連休になっているようなので、その時に訪問しようと勝手に計画を練り始めた。二〇〇二年に四国を訪問して以来、約一〇年ぶりの四国旅行なので他も巡ってこよう。以来、私は時間がある限り、別子銅山訪問に向けて計画を練り始めた。

これは単なる偶然の産物なのかもしれないが、二〇一五年から始めた古本入力の仕事の中で、荒俣宏『黄金伝説』　集英社　一九九〇年第一刷。という本を見つけ、目次を見たら、私の地元八王子の「絹の道」や、以前荘川合掌造りで取材した横浜の「三溪園」などの中に「第七章　深山に眠る〝銅山王〟のユートピア　広瀬宰平　別子・新居浜（愛媛）編」という内容が目に入ってきた。今から二〇年以上前に別子銅山を取材した本があったのかと、その箇所だけを熟読した。

この本が執筆された頃は、今みたいに新居浜が別子銅山跡地を観光地化する以前だったようで、山登りもかなり大変だったことが、文章のあちこちから読み取れる。かつての銅山の繁栄がウソのように、現在の別子は寂れていると最後に書かれていた。時期的にバブル崩壊の直前だった。

また更に『人物探訪　日本の歴史一四　農商の偉人　暁教育図書　昭和五〇年発行』の中にも数ページだけだが、住友と別子銅山の記述を見つけた。大型の歴史図鑑の体裁になっており、どちらかというと青少年向けに書かれているらしく、図入り写真入りの分かりやすい内容である。

市のＨＰの概略によると、愛媛県新居浜市は、瀬戸内海側のほぼ中央に位置し、二〇一五年現在の人口は十二万三〇〇〇人、元禄四年（一六九一）の別子銅山の開鉱により繁栄し、沿岸地帯は四国屈指の臨海工業都市となった。二〇〇三年（平成十五）四月に旧別子村と合併した。

私は新居浜駅を降りてびっくりした。駅前は開発されて大型スーパーが出店し、大きなバスターミナルもあり、後述するマイントピア別子や銅山跡地を観光地化した近代的な街になっていた。前日二日間、私は香川県の多度津に滞在したが、多度津は典型的な地方の街で、東京ではもう殆どお目にかかれなくなった平屋建ての小さな駅舎と併設のパン屋、駅前にホテルがある以外は、蒸気機関車が走っていた頃をしのぶものがあるだけだった。新居浜とは対照的だった。

初日は新居浜南高校ユネスコ部の学生九人と顧問の河野氏と私。二日目は更に教師三人が同行しての山登りとなった。いずれも快晴で、絶好のハイキング日和だった。

帰宅後の二〇一五年十一月五日の東京新聞の夕刊の「旅」のコーナーでかなり大きく別子銅山が紹介された。ガイドの人からかなり詳しく紹介されたようで、記事も丁寧で、記憶が蘇ってきた。東京ではそれ程知名度はなくて、るるぶやまっぷるのようなガイドブック以外では余り紹介されていないように思える。ローカル紙だからこそ紹介できたのではないか。

一日目は東平（とうなる）・端出場（はでば）を訪問した。新居浜駅前から河野氏の車で新居浜南高校に行き、そこでユネスコ部の学生たちと合流し、一緒に東平へ向かう。途中、車はループ橋を渡る。この橋は「青龍橋（せいりゅうばし）」という。学生の説明によると、この橋のネームプレートは、新居浜南高校の卒業生が書いたものである。また昔、この地は元々地形が急で、道幅が狭く急カーブも多かったために大型バスや、車体の大きい車は通行が困難だったが、二〇一〇年四月二八日にこの橋が開通した。長さは約四四〇メートルである。

ループ橋を渡ったのは数十年ぶりである。一九九九年春、伊豆高原に旅行した時、静岡県の三島から伊豆箱根鉄道で修善寺へ出て、そこから伊豆急行線河津へ向かう路線バスに乗車した時、バスがループ橋を渡り、その時初めてループ橋を渡った時のことを思い出し、新居浜にもループ橋があったことに驚いた。

このそばに鹿森（しかもり）ダムがある。多目的ダムとして一九六二年（昭和三七）に完成した。工業用水として使われ、工業都市新居浜には無くてはならない重要な水源だった。

更に立ち寄ったのが清滝。別名紅葉渓谷と呼ばれるほどの紅葉の名所であり、えひめ自然百選にも選ばれ、新居浜の景勝地として人気のスポットである。山の精清姫と川の神がお互いの美しさを競ったという伝説がある。

車は最初の目的地「東平歴史資料館」へと向かう。この後マイントピア別子に向かう時もそうだったが、当日はシルバーウィーク中だったために交通量が多くて、車のすれ違いが難しく、然もそれが何台も連なっており、すれ違うのが大変な状態の中を走った。やはり有名な観光地だからなのかもしれない。夏休みやゴールデンウイークも似たような状態になっているだろう。もしかしたら、県外からも沢山の観光客が来ているのかもしれない。

この東平エリアは、標高七五〇メートルの山中に位置し、一九〇二年（明治三五年）の第三通洞貫通を契機に、一九一六年（大正五）から一九三〇年（昭和五）まで採鉱本部が置かれ。最盛期の人口は約五〇〇〇人だった。一九六八年（昭和四三）の閉鉱により人々は離れたが、採鉱場、貯鉱庫、索道停車場、第三変電所等の産業遺産が残っている。

東平歴史資料館に到着した。石を積み上げて作った平屋の建物で、入口の屋根

部分に三本の黒い煙突のようなものが立っていた。ここで学生たちから様々なガイドを受けた。先ず、この地区「東平」の由来を聞いた。

この珍しい「トウナル」という地名は東に平と書き、その由来は、山道を登りつめて、下にかかる所を峠という。「トウ」は山の峠という意味で、「ナル」はなだらかな所、つまり平らな所を意味する。峠のなだらかな所という意味で「トウナル」といわれている。「トウ」に東という漢字をあてたのは、東は太陽が昇る縁起の良い方角であることから、また「ナル」に平の字をあてたのは、なだらかなたいらということからである。変わった読み方をする地名だが、そういう由来があったのだと知った。

それから今度はこの資料館全体の説明を受けた。ここでは別子銅山三〇〇年の歴史を紹介している。またジオラマ、地形模型、パネルなどが展示されており、とても分かりやすく知ることができる。この東平歴史資料館の外見については、鉱物を連想させる造りになっていて、入口の屋根に立っている三本の細長いものは煙突をイメージしている。その場所にこの資料館が建設された。この資料館の屋根は、広瀬宰平が好きだった船をイメージして作られている。資料館の開設は一九九四年（平成六）である。

資料館の中に入ると目に付くのが、「地域活性化に役立つ産業遺産」の認定書で、二〇〇七年（平成十九）に認定された。甘利元経済産業大臣の署名が入っていた。平成十九年から翌二十年にかけて、全国の近代化産業遺産を地域活性化のために認定していこうという取り組みの一環として別子の遺産もいくつか認定された。次に別子銅山を空から見下ろしたようなジオラマがある。別子銅山の本部は旧別子から東平、東平から端出場へと移転していった。

更にいくつかのジオラマも展示されている。「東平娯楽場」は一九一二年（明治四五）に建築され、建築当時は二階建てだったものを、太平洋戦争中に三階に改築した。一階では演劇や歌舞伎などが上演され、観客席や舞台、花道があった。二階は映画上映のためのシアタールームと観客席があり、三階にはビリヤード場もあった。天井にはシャンデリア、扇風機が設置されており、当時としてはとても豪華な作りになっていた。収容人数は約二〇〇〇人だった。人々の憩いの場として親しまれていた東平娯楽場は、一九六八年（昭和四三）にその歴史の幕を閉じた。展示されている写真にあるように、住友の社章の井桁マークがある。

次は「東平小学校」のジオラマを見る。東平小学校は、一九〇六年（明治三九）に住友によって設立された。昭和四三年に閉校するまで二五七四名の生徒が卒業した。年に一度の運動会は東平最大のイベントだったが、グラウンドが狭かったため運動会は一の森の頂上で開催されていた。一九四六年（昭和二一）の学制改革により、東平中学校が設立すると、小学校は中学校と合併し、昭和四三年に閉校するまで、中学校では六〇〇名の生徒を送り出した。土地が狭かったため、

剣道や卓球といった室内競技が盛んで、市内大会では優勝していた。現在、小・学校跡地は「銅山の里自然の家」が整備され、研修棟や宿泊棟、バーベキューの設備が整った施設になっている。

隣は社宅のジオラマだ。一九〇五年（明治三八）から翌三九年にかけて建設され、山の斜面を段々畑のように建てられたハーモニカ長屋と呼ばれた集合住宅だった。灯りがともると高層マンションのようにきれいに見えた。窓から出ている杭みたいな棒は、洗濯物を干すのに使っていた。共同浴場もあり、そこは人々の情報交換の場であった。社宅に住んでいた人々は皆家族のような感覚で、暖かい生活を送っていた。今のように派遣や契約社員ばかりの会社の様相とは全く異なっていたことが分かる。

木枠で囲まれ、ビニールで覆われていて、下に鎖でつながれた背負子がある。木枠の上に「三〇キロあります」と大きな文字で書かれている。仲持ちさんという鉱石を運んでいた人の体験ができる。これを「負夫　おいふ」という。

石造りの東平歴史資料館。別子銅山跡を示すジオラマと住友の社章の入った娯楽施設跡復元ジオラマ。

ここからは吹き抜けになっており、ガラスケースで展示してある。実際にくっつけることのできる電磁石や、更にスクリーンがあり、そこでは東平の紹介、東洋のマチュピチュといわれる所以、昔の東平の画像も紹介される。それから別子銅山の紹介を主に銅山と鉄道を中心に解説される。また昔の生活の紹介、小学校や娯楽施設に関しての画像、東平の昔の生活を語り継ぐ男性による子供時代（主に昭和三〇年代）の話を聞くこともできる。

少し歩くと銅鉱石や群生する植物が展示してある。河野氏から解説を受けながら展示物を眺める。

資料館を出て外に石造りの経年をしのばせるトンネルがある。これを「小マンプ」という。「マンプ」とは坑道のことであり、小マンプは東平集落近くに位置したトンネルのことで、長さが短いことからこう呼ばれた。この小マンプは今でも往時のまま残っており、自由に中に入って見学ができる。採掘のための機械や

鉱物を積んだ鉄道車両が展示してある。大体平均的な大人の身長ぐらいの高さだから、屈んだり頭を下げたりする必要はない。

一九一六年（大正五）から一九三〇（昭和五）まで、別子銅山採鉱本部が置かれ、保存、展示してある「かご電車」は、住友金属鉱山株式会社別子事業所の好意によって寄贈された。

この「かご電車」は一九三八年（昭和一三）から一九七三年（昭和四八）の休山まで東平口（新居浜側）と日浦間（別子山側）、三九一五メートルの坑内を行き来する人々が乗った人車で、鉱山労働者以外の人たちも無料で乗車できた。銅山峰の峯南側と峯北側を結ぶ重要な交通手段で、その形から「かご電車」の愛称で親しまれ最大八人乗り。車内は狭く、これで八人乗ったらかなり窮屈だろうと思ったが、説明した生徒によると、当時は小柄な人が多かった。ならば納得できる。また展示品の大きな籠は「索道のバケット」または「搬器」といい、東平～端出場間等に架設された索道と呼ばれるロープウェイ状の運搬設備に荷物を入れ、籠として使われていた。この索道は鉱石などを運ぶための鉄道や様々な大きな物や鉱石の運搬に使われた。この搬機は一回で五〇〇キロを運ぶことができる。大体力士二人ぶんだが、実際に人が乗ることはできない。東平から鉱石を下し、端出場からは生活物資をあげていた。

「小マンプ」の入り口は実際に入ることができる。「かご電車」の車内はすごく狭いのに驚いた。「索道バケット」、これに鉱石や生活物資を詰めていた。

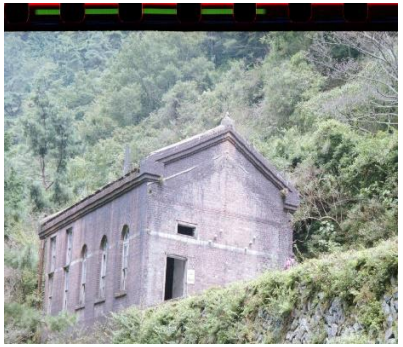
生徒たちと歩きながら次の地点「第三通洞」に向かう。緑に覆われた両サイドの石垣に、石造りのトンネルがあり、黄色の鉄製の門で鍵がかけられ、「立ち入り禁止」と掲げてある。第三通洞は別子銅山二代目支配人の伊庭貞剛（いばていごう）によって一九〇二年（明治三五）に東延斜抗までの約一七九五メートルが貫通した。更に一九一一年（明治四四）に別子の日浦通洞までが貫通し、東平から日浦までの約四〇〇〇メートルが結ばれた。昭和に入り、前述したかご電車の

運転も始まり、新居浜側と別子山側をつなぐ唯一の交通手段として一般の方も利用でき重宝された。天候不順で電車が通らない時は（通洞内は人の出入りは禁止されていた）。別子山側は約五時間かけてこちら側に来ていた。

苔むした小さなトンネルがある。どう見ても人が入れる大きさはない。これは「火薬庫」。坑道掘削の爆破作業のために使われるダイナマイトの保管のために重要なものであり、長さはおよそ三〇〇メートル。一九一二年（明治四五）、旧第二探坑坑道（鉱床を探すための坑道）として設置され、一九六八年（昭和四三）まで五十六年間使われた。この場所を選んだのは岩盤が固かったからで、我々がいた広場に対して斜めに作られているのは、もし火薬が爆発しても道の反対側にある採鉱本部まで被害が及ばないようにするため、鍵穴状に掘削された。

しばらく歩くと、高台に古びたレンガ造りの建物、「第三変電所」がある。元は赤レンガだったようだが、経年化して赤味はない。「第三」というのは、第三番目という意味ではなく、第三通洞の名前にもあるように、この辺りを第三地区と呼ばれ、そこにある変電所なのでこの名前が付いた。変電した電気は工業用と家庭用に使われた。建物がレンガ造りなのは、万一火災が発生した場合に燃えにくくするためであり、電気がいかに重要なものであったかが分かる。当時の原型をとどめており、内部にも当時の面影が残っている。

少し歴史的なことにも言及すると、建設されたのは一九〇四年（明治三七）九月、東平が閉抗する少し前の一九六五年（昭和四〇）まで、六一年間にわたって使用された。東平で当時のままの建物が残っているのはここと採鉱本部（現在はマイン工房として使用）だけだが、内部まで残っているのはこれだけである。



赤レンガ造りの第三変電所外観。畳が置いてある部屋、生活の一端が伺える。かご電車が走っていた大マンプの跡。

内部は風呂、トイレ、台所の跡など、あちこちに往時の生活の一端が伺える。壁や柱にも過ぎ去った時代を感じることができる。但し足元には注意が必要かもしれない。更に歩くと古くなったレンガ造りのトンネル跡が見えるが、鉄製の扉

が閉められ、上には鉄条網が張り巡らされている。大マンプといい、東平と第三通洞を行き来した鉄道車両の専用車道で、かつてはかご電車が走っていた。電車の開通によって通勤や通学に使用され広く人々の生活に欠かせない交通手段として利用された。

さて、いよいよ展望台に歩いて登り、そこから下を眺めるとレンガ造りの建物、旧東平貯鉱庫と選鉱場を眺める。この眺めがマチュピチュに似ているために「東洋のマチュピチュ」といわれるようになった。高台だから、瀬戸内海の風景も見ることができる。多くの観光客が下を眺めていた。本当に空中都市に来たかのような感じになってしばらく下を眺めた。そこから歩いてインクライン跡に行く。インクラインとは傾斜面にレールを敷いてトロッコを走らせるケーブルカーのことである。荷物を運ぶ二台の台車がそれぞれ両側にあり、片方が上がると片方が下がる仕組みになっている。傾斜は約三五度、長さは約一〇〇メートル。高低差の激しい場所での運搬には欠かせないシステムだった。実際に運搬をする際には上から建築資材を下し、その重さを利用して生活物資を下から上へとあげていた。現在は遊歩道となっており、二二〇段の階段に生まれ変わった。結構な段数だが、上り下りする観光客が沢山いた。実は私は前日、香川県多度津の沖合にある佐柳島（さなぎじま）に一日滞在した。その島には猿田彦神を祀る「大天狗神社」があり、境内に天狗の石像があり、その石像をみるのに約四〇〇段の急な階段を登る必要がある。実際に登ってみたが、木製の階段の枠組みは崩れており、かなり足元に注意しないと危なくてひやひやする。後述するが、私は日ごろデスクワーク中心で運動不足気味なので、もしかしたら途中でばてるかもしれないと懸念したが、それでも途中で少し休み休みしながら何とか登り切った。その神社の石段に比べれば約半分である。

目の前に大きなレンガ造りの建物が迫ってきた。これが「索道場」という施設の跡であり、ブログで紹介されていた。先ほど展望台から眺めたのはこれである。余りの大きさにしばらく立ちすくんでしまった。ちょうど、初めて富山県の世界遺産として有名な五箇山、相倉集落を訪問して、相倉口の停留所でバスを下車して道なりに歩き、相倉の合掌造り集落を見たとたんに私はやはりしばらくその場に立ちすくみ、暫く言葉も出ずにいた状態と同じだった。

索道場とは、貯鉱庫、選鉱場、索道基地の三つからなり、索道場の役割は、鉱石を東平索道場へ集め、新居浜の端出場に搬出するもので、生活物資や坑内で使う資材を端出場から搬入するために利用された。

索道場では主に貯める、分ける、貯める、運ぶ工程が行われ、最初の作業は坑道から運び込まれた石を貯めるのを貯鉱という。次に鉱石とそうでない石に分ける選鉱に回し、鉱石は再び貯鉱されて索道を使って運ばれた。索道とは鉱石や

生活物資を運ぶロープウェーイのようなもので、実際に運搬する際には搬器とよばれる器のようなものを取り付けて索道を動かした。

選鉱場は一九〇五年（明治三八）に設置され、一九三〇年（昭和五）に端出場に移り廃止された。索道基地は東平から新居浜側の黒石ルートができたのが一九〇五年で、その後端出場側ルートへ変更したのが一九三五年である。このレンガは今のしまなみ海道を使って運ばれ、約八〇〇〇個使ってある。合掌造りにしてもそうだが、これだけの大理石を全部運び、大きな設備を造った昔の人の技術にはつくづく驚嘆する。

この辺りには「ヘビノネコザ」という植物が群生している。蛇がとぐろを巻いて寝るのにちょうどいいからこの名前が付いた。シダ植物に似ており、金属を好む。最初に銅を見つけた際、この草を目印に銅鉱を発見した。

右上は東平索道停車場跡を下から撮影した。見上げるぐらい大きな跡である。右下は東平貯鉱庫跡。左上は貯鉱庫を上から見た所。左下は社員住宅跡。スケルトンが建てられている以外、区割りみたいなのが見られる。

皆で歩きながら林の中に入る。突然大きな窪みが出現した。ここは東平娯楽場の跡地で、この窪みは廻り舞台の跡である。溝の跡もあり、奈落といって役者がここからせり上がって舞台に突然出たりした場所である。この娯楽場の敷地面積は三〇〇坪程度、畳にして約六〇〇畳ぐらいだから、いかに広かったかが想像できる。現在は杉林に覆われているが、当時、娯楽場前には桜の木があり、見事な花を咲かせていた。この東平娯楽場については、東平歴史資料館で説明を受けたので詳しい内容は省略する。往時の賑わいを彷彿とさせる場所も、今は杉林の静けさの中に覆われている。

更に歩くと「保育園跡」と書かれた木のボードと、苔むしたコンクリート製の半円形の浴槽みたいなのがある。更に門柱の跡みたいなのが目に入る。ここが東平保育園跡で、この浴槽みたいな物は元プールだった。保育園は一九五〇年（昭和二五）に開設され、一九六八年（昭和四三）までの一八年間、幼児教育の中心だった。三歳から小学校入学前の子供を預かり、園児は東平全域から通園していた。園児たちでにぎやかだった保育園の跡地も、今は木々に覆われており、説明書きが書かれたボードの写真のみが、当時の姿を今に伝えている。

林の中にブロック塀に横たわったままの錆び付いて潰れかけた箱がある。ここは東平生協の跡である。この生協は一九〇六年（明治三九）に配給所として開設され、閉山までの六二年間、東平の台所として人々に親しまれ、一九五八年（昭和三三）には配給所から生協に生まれ変わった。いつも新鮮な野菜や肉等、生活必需品が揃っていた。配給所への輸送は、下部鉄道を利用して端出場まで運んだ後、そこから索道を使って搬器に積み替え、東平索道場まで運んだ。索道場に到着した物資を、搬器から台車に積み替えてインクラインを使ってここまで運んできた。建物は二階建てで、一階は配給所、二階は商品を置く倉庫だった。生協のお陰で、東平の住民は山を下りて買い物に行かずに済み、とても便利に暮らすことができた。

ここには病院も建てられていた。それが住友別子病院東平分院である。当初、東平出張所として一九〇五年（明治三八）十一月一日に開設し、一九六八年（昭和四三）三月三一日に閉院し。明治に開設した時は内科外科の診療が行われた。医師が優秀だったため、東平の人のみならず新居浜や今治からも人が受診に訪れていた。そのため東平の人の診療が遅くなっていると苦情が出たぐらいだった。普通の病院のほかに、隔離病棟と避病舎も設置され、法定伝染病の人たちの収容も行われていた。なお、病院の屋根はピンク色だったことが分かっている。

六三年の長きにわたり、東平の人たちの命と健康を守ってきたこの病院も、今はひびの入った石造りの門柱を残すのみとなっている。

娯楽施設の石造りの奈落の跡と保育園跡地に残っている石造りの小さなプール跡、錆びた冷蔵庫が置かれた生協の跡。人々の賑わいも、かつての繁栄も今は森林の中にかき消されている。

ここ別子銅山には別子一号機関車が走っていた。ドイツ製で当時最新鋭だった。別子銅山記念館で保存してあり、この後行くマイントピア別子でも再現されて観光列車として走行している。松山の路面電車の観光列車として有名な坊ちゃん列車も、この機関車と同じドイツ製である。坊ちゃん列車は環境に配慮して蒸気機関車の外見をしているが、実際はディーゼルカーであることをこの後松山に行って実際に乗った客車のガイドの車掌さんから伺った。

東平歴史資料館近くの高台に赤レンガの建物がある。現在はマイン工房となっていて、観光客に世界で一つだけのレリーフ作りを体験したり、作ったりできるが、かつてここは採鉱本部であり、別子銅山の中枢として坑内の管理、保安、採掘に関する全ての管理を担っていた。近くにプラットホーム跡の案内板が見える。東平から第三通洞、更には別子側の日浦まで走る電車の駅だった場所に我々は立っていた。鉱夫たちが鉱山に入るために乗った電車で人車には台車に座席がついた程度だった。人車の後ろにはかご電車が連結され、これは一般の人も乗車できた。

この後、河野氏と学生たちと車に乗ってマイントピア別子に向かった。マイントピア別子は「見て触れて体験型遊学パーク」とパンフレットに書かれている。「江戸ゾーン」、「近代ゾーン」、「体験ゾーン」の三つの区画に別れている。それ以外にも当時のままのトンネルや鉄橋を走る蒸気機関車が牽引する鉱山鉄道にも乗車することができる。本館は一階にはお土産・売店の「マチュピチュ」と喫茶「シェラトン」がある。二階はレストラン「もりの風」、三階は宴会場「あか

がねの間」、そして四階には温泉施設「ヘルシーランド別子」が併設されている。温泉施設は四月十五日にオープンした。

明治時代を彷彿とさせる赤レンガ造りの建物に到着したが、当然ここもものすごい数の観光客でごった返していた。両サイドに旗がなびいており、ベンチに座って休息している訪問者もいた。然もちょうどお昼時だったこともあって、私も空腹を感じたので取りあえずレストランでお昼にした。学生たちは喫茶店で食べるらしく別行動になった。予測していた通り、レストランも殆ど満席に近く私独りだったから何とか座れたが、親子連れなどで賑わっていた。

「ピーッピーッ」という汽笛が鳴り響き、汽車が発車した。二〇一四年七月の連休を使って、私は名古屋の明治村に行ったことがあったが、明治村内にも当時のままの蒸気機関車が木製の客車を牽引していた。その時のことを考えながら皆で汽車に乗車した。約一〇キロのスピードで鉄橋とトンネルをくぐって観光ゾーンのある駅に到着した。そこで先ほど渡ってきた鉄橋とトンネル、「打除鉄橋と中尾トンネル」の説明を受けた。打除鉄橋（うちよけてっきょう）は一八九三年（明治二六）にかけられた。この橋は鋼材の連結点がピン（鉄の丸太）で組みたてられたためにピントラスと呼ばれる。この種の橋は国内に六か所のみで更に岸に対して斜めに欠けられている所から非常に珍しく、学術的にも大変貴重なものである。中尾トンネルはこの乗り場からは見えにくいが、打除鉄橋と同年に開通した。かなり力を入れて作られており、当時の技術力の高さと職人たちの意気込みが伝わってくる。

マイントピア別子の入り口、訪問客が多い。打除鉄橋を渡る園内の観光列車。赤レンガで造られた観光抗の入り口。

これから観光坑道に入る。坑道内は、人形やジオラマを使って当時の様子が再現されている。この坑道は元火薬庫で現在は昔の別子銅山の様子が模型で表現されている。この坑道の長さは約三三三メートル、東京タワーの高さと同じである。

次に四阪島（しさかじま）の模型を見て説明を受けた。四阪島は瀬戸内海に浮

かぶ島で鼠島、家ノ島、美濃島、明神島のから構成されていた。新居浜での煙害問題を解決するために別子銅山支配人伊庭貞剛が、一八九五年（明治二八）に無人島を購入し、一九〇四年（明治三七）に精錬所が完成したが、煙害が東予一帯に広がる結果となり、努力の末、一九三九（昭和一四）近代技術を結集した中和工場の建設によって四〇年に及んだ公害をついに克服した。この島は一九七六年（昭和五一）に銅製錬を終えたが、翌年から産業廃棄物のリサイクル島として生まれ変わり、現在、関係者以外は立ち入ることができなくなっている。

第一、第三、第四通洞と歓喜坑の模型もある。第一通洞は別子銅山最初の通洞で、通洞とは輸送用のトンネルのことで長さは一〇二一メートルある。第三通洞は先ほど見てきたが、第二通洞が無い理由は、第二通洞の掘削中に水が溢れ出てしまい、第三通洞が先に完成したために掘削が中止されたためである。

色黒の手ぬぐいを肩に置いて石を持った男の人形が次の場所に展示してある。阿波徳島県出身の切上り長兵衛（ちょうべえ）である。別子山中で銅鉱脈を発見し、住友家による別子銅山開発のきっかけを作った人である。切上りと呼ばれた由来は、坑道を上向きに掘るのが得意だったからである。また、手に持っている石は銅鉱石である。

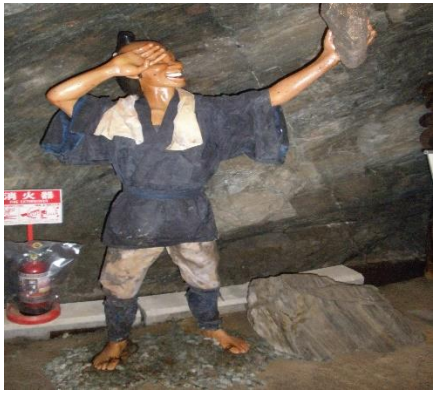
鉱夫たちの模型もあり、「負夫（おいふ）と堀子」という。手にサザエの殻にクジラの油を入れた当時の灯り「螺灯（らとう）」を持つ。良く見ると足の先にしか草鞋を履いていない。それは当時藁がすごく貴重だったのと、素足に近い方が坑内を歩きやすかったからである。腰の丸いものを「尻敷（しりすけ）」という。これは万一落盤事故があっても、わらをかんで空腹を紛らわしていた。前述した切上り長兵衛も落盤事故の際、これを食料代わりにした。

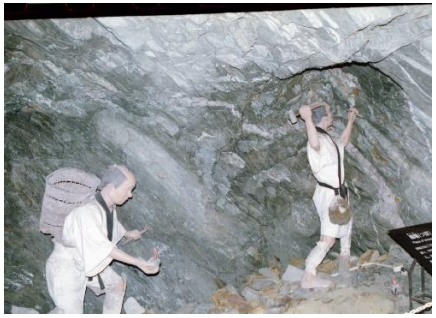
当時の採掘の様子も再現されている。二人の人形が坑内で採掘をすすめているが、坑内はこれ程広くなく、人一人が入れる程度しかなくて「タヌキ掘り」とも呼ばれていた。白い装束を着ている理由は、一つは目立って気づきやすくするため、もう一つが黒帯を取ったら死に装束となり、この仕事が命がけであったことが分かる。

岩の窪みに人が段を作って数人ごとに立ち、木製の樋みたいなもので水を引き上げている様子が再現されている。これは湧き水を引き上げる様子であり、採鉱中に発生した湧き水によって、採掘が難しくなった。それを解決するために湧き水を上へと引き上げる方法を導入した。一分間に一五三リットルを汲み上げ、一升瓶では約八五本に相当した。一日二四時間、一人に付き二～三時間交代で行った。この水は酸性のために肌荒れがひどくて、指紋が薄くなった。坑内で一番大変な仕事だった。

機械が全くない時代、人力だけでこの仕事をやり遂げた当時の人たちの努力に改めて敬意を払うと同時に、簡単に機械で作業ができてしまう現代の我々に

はその大変さが容易に想像できなくなってしまう。





切上り長兵衛の銅鉱脈発見を再現した様子と、タヌキ掘りといわれた坑内での採掘作業の再現図、坑内で発生した水をこのように汲み上げていた。

鉱山労働者は坑内を出てすぐに風呂に入れるように、歓喜鉱には浴場が設置されていた。この時代は風呂が少なかったため、共同浴場であった。日々の労働の疲れを癒やすだけでなく、情報交換の場でもあったため、風呂場が労働者にとって貴重な場所でもあった。坑内の温度はきっとものすごく暑く、想像を絶するようなものであっただろう。そんな仕事の後の憩いの場が風呂場だったのである。

この銅山は女性も労働力であった。砕女小屋（かなめごや）と呼ばれる場所では、女性たちが銅鉱石となる石を砕いて小さくした後に、精錬という銅を取り出す作業をしていた。女性の身ならず男性もこの作業に従事しており、坑内が狭かったために、主に背の高い人が携わっていた。

別子銅山での精錬についても説明を受けた。別子銅山の銅鉱石には銅の他、鉄と硫黄が含まれていたために、銅だけにしたかった。最初は硫黄を取り除く作業にかかる。かまどで銅鉱石を蒸し焼きにした。これを「焼鉱（しょうこう）」といって約一か月かかった。次は鉄を取り除く。硫黄を取り除き鉄と銅にした石を熱で溶かすことで銅は鉄より重いので下に沈殿して銅と鉄が分離する。このような手順を踏んだ別子の銅は「粗銅」（あらどう）と呼ばれ、大阪へ船で運ばれ、銅座に運ばれた銅は細くて長い棹銅にされて貿易に使われた。

仲持ちさんという運搬夫がこの粗銅を運び出し、帰りは米や新鮮な野菜や魚を持ち帰った。男性は四五キロ、女性は三〇キロあったという。

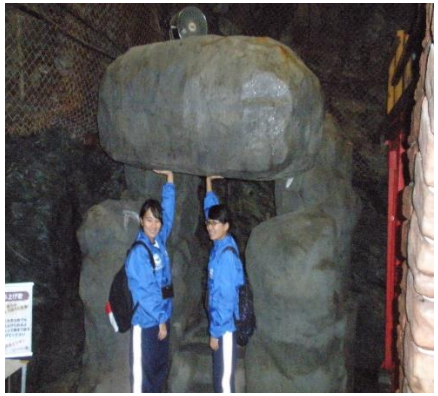
その粗銅を大阪に運び、山役人による粗銅改めを行い、十三パーセントの税金がかかった。

赤い鳥居の向こうに神棚がある。鉱業を行う者が信仰していた大山積神（おおやまづみのかみ）を祀ってある。ここで一同旅の安全を祈願した。

これら一連の様子が全部模型と人形で展示してある。

次は「近代ゾーン」である。ここは明治から大正期にかけての別子銅山の様子が巨大ジオラマや模型で展示してある。別子一号機関車の模型も走っていて、子供でも楽しめそうな模型である。

「体験ゾーン」があって、掘削機や湧き水汲み上げ、遊園地的な場所もあったが、当日は物凄い混雑で、子供たちの遊ぶ声や、他の観光客の声が館内に響き渡り、これらのゾーンは立ち寄らず、力持ちコーナーに大きな石の模型を実際に高校生部員二名に持ってもらった。



近代ゾーンにあるジオラマ、当時の作業を再現している。汽車も走っている。石の模型を実際に持ってもらう。

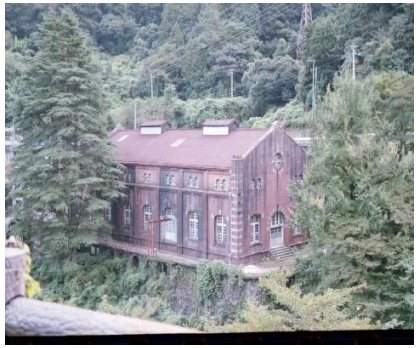
マイントピア別子を出て、園内にある施設跡を見て回った。煉瓦でできた水路の跡は、煉瓦水路、抗水路跡であり、伊庭貞剛によって工事がなされた。坑内水が含銅硫化鉄鉱という環境に悪い水になったので、そのまま流すと悪い影響が出るのでこの抗水路が作られた。坑内水路の一部であり、ここから坑水路を伝って山根収銅所へ送られ、浄化処理していた。公害防止のための努力の証でもある。

第四通洞は東平からの大動脈として別子銅山の近代化に貢献した。東平の第三通洞へ続く重要運搬坑道として一九〇九年（明治四三）に掘り下げはじめ、完成までに十三年を想定していたが、約五年八ヶ月で四八〇〇メートルまで完成させた。その後約五一〇〇メートルの探鉱通洞が掘られ、一九四二年（昭和一七）に完成し、総延長一万メートルを越えた。トンネル入り口の「第四通洞」と刻まれた文字は、住友家一五代家長、住友友純氏（すみともともいと）の筆による。

「泉寿亭」（せんじゅてい）という建物も見物する。これは一九九一年（平成三）に当地に一部が移築された。別子銅山三〇〇周年記念時に跡地に図書館を建設するために主要部のみを移築した。建物自体が建てられたのは一九三七年（昭和一二）である。二〇〇九年（平成二一）には登録有形文化財にも登録された。

来賓を迎えるためのものであり、戦時中は東条英機（一八八四年　明治一七～一

九四八年　昭和二三。陸軍大臣、第四〇代内閣総理大臣）も宿泊した。名前の由来は、住友の屋号「泉屋」が寿ぐとの意味である。今でも時々お茶会が催される。



第四通洞の入り口と泉寿亭の外観と黒ずんだ跡が残っている旧端出場水力発電所。

端出場水力発電所は当時日本最大の発電量を誇った。発電に使用する高低差は約六〇〇メートルだった。外観は当時としては珍しいアーチ状の窓等、凝った作りになっている。内部にはドイツのシーメンス社製の機械がある。煉瓦の積み方は「イギリス積み」といって、長い煉瓦だけを連ねた上に今度は短い煉瓦だけを連ねる方式である。外観が黒くなっているのは太平洋戦争中の迷彩の跡である。現在は内部の一般公開をしていないが、公開へ向けて準備中である。

こうして、一日目の東平・端出場地域の訪問は終了し、私は新居浜南高校で学生たちと別れ、河野氏の車で新居浜駅まで送って頂いた。明日は別子銅山跡を巡って登山をするとのことなので、きちんと食事と休息をとって備えなければと思いながら宿に戻った。当日は快晴だったので、願わくば明日も快晴であることを願った。

二日目、二二日。別子銅山旧蹟巡りトレッキング。

※このハイキングコースでは、登山口とダイヤモンド水以外の場所にトイレはありません。登る前にトイレを済ませておくことをお勧めします。

二日目も見事な快晴、いや猛暑だった。食事も睡眠も充分だったが、かねてから書いている通り、私は日頃デスクワーク中心で運動不足気味で、もう何年も山歩きをしたことが無かった。成長途上の高校生たちと一緒に歩いて、今年中年と

言われる年齢になった私がバテて足手まといにならないかと不安が頭をよぎってしまった。佐柳島の四〇〇段の足場の悪い石段を登れたと変な自信を自分に言い聞かせた。

駅前の宿を出て駅から河野氏の車で新居浜南高校に向かって、生徒たちと合流した。お昼を食べる場所がないため、コンビニでお昼ごはんと飲料水を購入した。こうして一抹の不安を抱きながらの山歩きが始まった。尚当日は生徒たち九人に更に教師三名が加わっての登山だった。登山口には駐車場があり、案内板とトイレがある。しばらくトイレがないので、ここで済まして登山を開始した。空気はひんやりしていた。

ここは旧別子といい、過去に繁栄していた別子という意味であり、標高は約八〇〇メートル、銅山峰は約一三〇〇メートルである。距離は片道約四キロあり、その間に元禄から大正五年まで二二五年にわたる多数の跡地が残っている。

円通寺（えんつうじ）跡に到着した。高台に上がると跡地があるが、時間の関係上そこには行かない。円通寺は別子銅山開坑から一九一六年（大正五）の旧別子撤退までの間に、火災や水害によって山中で亡くなった人々や、無縁仏となった人々の墓碑が現存している。旧別子撤退後、円通寺の地蔵は別子山の南光院（なんこういん）に移され、現在も欠かさず供養が続けられている。

小足谷（こあしだに）集落跡地に到着した。この辺り一帯が小足谷集落で、名前の由来は険しい谷の川、ケワシダニから来たというのと、鉱毒が流れており悪し谷の川というのと二つのいわれがある。

ここに小足谷醸造所跡がある。当時、酒や味噌、醤油は西条から運んでいたが、当時の従業員が運搬中に酒を飲んでしまったため、酒は水を加えて作ったもの、醤油は塩水に着色してできたもので質が悪かった。これを見かねた広瀬宰平が一八七〇年（明治三）にここに醸造所を設置した。最大繁栄時で年間一〇〇キロリットルの酒を製造し、銘柄を「井桁正宗」（いげたまさむね）、別名「鬼殺し」と呼ばれていた。その由来は、山で働いている坑夫たちを鬼とたとえ、強くてたくましい山の男たちもこの酒を飲むと酔いつぶれてしまったことからその名がついた。然し一九一一年（明治四四）に製造中止となり、醸造所は一九一四年（大正三）に廃止になった。

昨日、旧端出場水力発電所でイギリス積みという積み方（短い煉瓦を続けて積んでその上に長い煉瓦を続けて積むという方式）が出てきた。もう一つ当時、フランス積みという積み方（長い煉瓦と短い煉瓦を交互に積んでいく）というのがあり、別子銅山は殆どイギリス積みだった。強度はどちらも変わりはないが、デザイン的にイギリス積みが好まれた。

ここもうっそうとした森林に覆われ、かつて酒や味噌を作っていた情景を思い出すことは難しい。

また近くに採鉱課長宅跡があった。石段の上にプラスの空洞の空いたレンガ造りの壁が残っている。接待館の奥、石段を登った高台の上にあり、現在は赤れんが造りの壁が残っている。採鉱課は当時の別子鉱業所の中で多数の職員を抱え、別子銅山経営の中核をなす重要な組織だった。それを統括していたのが採鉱課長だった。現在館跡には植林がされている。

それから接待館というのは「小足谷接待館」という。明治初期に設置され、要人の宿泊や大切な客、職員の懇親会に使われた。住友に雇用されたフランス人鉱山技師ルイ・ラロックはここに宿泊して、別子銅山近代化の計画書である「目論見書」を作成した。館内には日本庭園があったが、現在はプラスの空洞の空いた赤レンガの塀だけが往時を物語っている。接待館を写した写真がボードに掲載されており、かなり大きな建物だったことが分かる。

醸造所跡にそびえたつ煙突、石段の上にある採鉱課長宅跡と木々に覆われた小足谷接待館跡。

小足谷収銅所は坑内から排水される水を処理するための施設。坑内から排水される水には銅成分が含まれ、環境に悪影響を与えてしまうため川に直接流せなかったためここで水の中から銅成分を取り除く処理をした。処理の仕方は、水に鉄を沈めると還元作用で銅と鉄をふれさせて、銅に鉄を付着させて銅成分を取り除いて綺麗な水にさせた。一八七九年（明治九）十二月に沈殿銅の試作と坑水の処理に成功した。

石にわだちの跡がある。このくぼみは荷車の車輪跡で、新居浜からの物資を先ほどの接待館や醸造所や小足谷部落へ送ったり、醸造所でできた酒を運んだりしたのでできた。このわだち跡は滑らないように掘ったという説と、ずっと運ぶために荷車の車輪でできたという二つの説があるが、通っただけではここまでできないだろうといわれている。

山道の右側に石段が見える。住友私立小足谷小学校の跡地だった場所で公立ではなくてあくまでも住友が建てた学校である。一八七二年（明治五）の旧制

学制発布の翌年に広瀬宰平によって開校した。海抜一〇〇〇メートルを越える山の中に学校があり、生徒数二九八人、教師数は七人であった。

この小足谷小学校跡地に並んである小高い石垣の上に、小足谷劇場跡がある。一八八九年（明治二十二）に建設され、収容人数一〇〇〇人を超える大劇場で、歌舞伎や劇が行われ、都会からも有名人が来ていた。昨日見た東平娯楽施設と同じようなもので、ここには円舞台があった。かつて多くの坑夫たちに娯楽と安らぎを与えた大劇場は、今や跡形もなく林を残すのみである。

小足谷劇場前の石段、回り舞台跡を生徒たちが棒を持って実際に回ってみてくれた。冷たくて全身が染みわたるダイヤモンド水。

高橋精練所の跡も説明を受けた。この後に休息を取ることになった「ダイヤモンド水」という湧き水の対岸から足谷川上流辺りまでにあり、一八七九年（明治十二）別子銅山初の様式精錬所として操業を始めた。溶鉱炉の不具合により、和式に転換したが、一八九一年（明治二十四）ごろから洋式操業になった。銅精錬の近代化は、採鉱高の急増に伴う鉱石処理能力の増大と燃費節約が目標だった。そのため、溶鉱炉の改造やふいごから送風機への転換、木炭からコークスへの転換などが行われた。一八九九年（明治三十二）の鉱石処理能力は一八七二年（明治五）の五〇倍に達していた。ここで精錬された粗銅は、立川（たつかわ）精錬所や新居浜惣開（そうびらき）精錬所に運ばれ型銅にされた。一八九九年（明治三十二）の別子大水害で壊滅的な被害を受けて、その後再建することはなかった。今では当時のからみ（銅を抜き取った鉄と石英だけの石）、石垣と暗きょを残すのみとなった。

ヤマリンドウの咲く山道を歩くとダイヤモンド水という場所がある。この辺りの標高は一〇〇〇メートルなので、少し涼しい。入口からここまではそれ程ではなかったが、ここから先が急峻になる。このダイヤモンド水は、一九五一年（昭和二十六）、鉱脈を探す作業中に深さ八〇メートルの所で地下水脈にあたり、水が湧き出てきたところから始まる。その際、ロッドの先についていた工業用ダイヤモンドが作業終了後回収不能となった。誰がつけた訳ではないが、「ダイヤモ

ンド水」と呼ばれ、この場所は登山者のオアシスとしてまた別子銅山の名所として有名である。ここで一旦休息をした。湧き水の近くにコップが沢山置いてあり自由に飲めるようになっている。やはり自然の湧き水は体に染みわたる。日頃の薬品まみれの水道水とはえらい違いである。

途中に精錬所の跡を見た。前述した大水害で流されたといわれている。カラミが溶岩のように残っている。また鉄道のレール跡みたいなのもある。手押し車を乗せたものだと思うが、リサイクルとして使った。

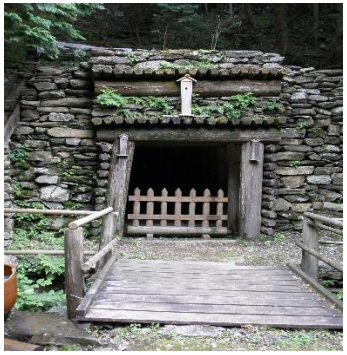
第一通洞（代々坑）は、別子銅山最初の通洞なので「第一」という名前が付いた。通洞とは輸送用のトンネルのことで、別子の通洞は日本で最初にダイナマイトを使って掘られた。全長一〇二一メートル、銅山峰北側の角石原と南側旧別子地区を結んでいた。第一通洞ができる以前、荷物は一回一回峠越えをして運んでいたため、冬には多くの犠牲者が出た。第一通洞は別子銅山近代化の第一歩となったのである。

この辺り一帯を「東延」（とうえん）という。その意味は銅の鉱脈がこの辺りまで伸びていて、それが一番東の端にあたったのでこの名前が付いた。東の意味も方角的なこと以外に、東平でも話したように日が昇る所からついた。一八七四年（明治七）に、住友が雇ったルイ・ラロックの構想に基づいて明治九年から開発が始まり、明治一八年に完成した。この先、歩いて十五分の所に東延斜坑（とうえんしゃこう）の跡がある。往復で三十分だが、私はまだ十分に歩けるし、学生たちも大丈夫なようなので行くことに決定した。険しい山道を休み休みしながら登り、東延斜坑跡に着いた。斜坑周辺は棘のある植物が多いので刺さらないようにご注意下さい。鳥の鳴き声が聞こえた。ここは別子銅山の近代化がスタートした場所で、それまでは江戸時代のアリの巣状態の掘り方を効率よく掘り出すためにフランス人技術者、ルイ・ラロックを雇って斜坑を掘るというアイデアをもらった。ラロックはフランス人を集めて、彼らの手でやろうとしたが、広瀬宰平はそれを拒否し、外国人の手を借りず、日本人の手で掘った。その理由として外国人に乗っ取られる心配と、日本人の技術力をつけたいという願いがあったので、敢えて遠回りする道を選んだ。約二十年かけて掘り進み、傾斜は四九度、深さは約五〇〇メートル。底は昨日見た第三通洞である。途中にレンガ造りの東延機械所跡がある。水がはってあるが落ちると大変なことになるのでご注意を。春になるとおたまじゃくしが沢山泳ぐようになる。これから東延までもと来た道を戻る。途中倒れた煙突の跡がある。この煙突が倒れた理由は、太平洋戦争中に敵の攻撃を避けるためだった。

目出度（めったまち）という変わった名前の場所を通過して、縁起の端（えんぎのはな）という場所についた。ここは別子銅山に初めて大山積神社を祀った所

であり、三六〇度別子銅山を見渡すことができた。また現在も三六〇度見渡せるパノラマとして観光名所となっている。今は緑に覆われているこの場所も、一〇〇年前は精錬で出た煙ではげ山だった。また別子銅山には銅鉱石を焼いていた場所があり、未だに土が傷んでいて植物が生えなくなっている場所がある。別子と同様に煙害で苦しんだ栃木県の足尾銅山は、ボランティアの方が一年間で一万本を一〇〇年間続けることにより百万本の植林を行う事業を行っている。また国土交通省も積極的に植林事業に励んでいる。別子銅山の植林は年間百万本で多い時は一年間で二五〇万本を行っている。これを聞くと、別子銅山の植林の規模が大きかったことが分かる。

山道を歓喜坑目指して歩いていく。途中に木の幹に「焼窯跡」と書かれた札が掲げてあり、地面に草むした穴が二つ空いていて、奥には大きな窪地がある。いよいよ目的の歓喜坑に到着した。これが別子銅山の記念すべき最初の坑道である。昨日言及した切上がり長兵衛によって一六九〇年（元禄三）に地表に鉱脈が現れた露頭が発見された。別子銅山の原点でもあり、また新居浜市の原点でもある。もう一つ似たような坑道がある。これが歓喜坑の東にあるので歓東坑（かんとうこう）といい、別子銅山二番目の坑道だった。両坑口は二〇〇一年（平成十三）に崩れていたのを、江戸時代の図面をもとに、開坑当時に近い姿で復元された。入口には木製の柵が設けられており、中に入ることはできない。近くに湧き水が出ており飲むことができる。皆ここでお昼ごはんにした。歓喜坑前で記念撮影をして更に上の銅山峰を目指して山道を登っていく。



上が縁起の端、元ははげ山だった。まだ一部山肌が露出している箇所がある。真ん中、歓喜坑。木の札が上に掲げられ、入口に柵が設けられている。下、橋の向こうにあるのが歓東坑。良く似ていて、パッと見ただけでは分からない。

山の向こうにコの字型の石垣が見える。遠くからだが見ることができる。「蘭荅場」（らんとうば）といって、別子銅山の大火災で亡くなった一三二人の内の四人を弔う場所であり、現在も毎年夏のお盆には蘭搭場に登って供養が続けられている。住職と住友の代表者が登りに来る。残りの一二八人は南光院に移され

て同じように供養が続けられている。新居浜では墓参りに行くことを「お蘭苔」とか「お蘭苔さんに行く」とも言う。赤い山肌が露出した所がある。縁起の端にあったような銅を整理する時に銅を一月ぐらい焼く作業場があった所で、当時の様子と現代とが比較できる。

高い場所から我々が歩いてきた道が見える。「牛車道」と言われ、使われた牛は広瀬宰平の故郷、滋賀県の近江牛だった。この牛車道が使われなくなった後、近江牛はすき焼きにされて食べられてしまった。

先ほど述べた鉱脈が地面から露出している石を実際に見られる場所がある。良く見ると所々穴が開いている。銅が雨に溶けた跡で、これが多いほど鉱石の品質が良い。近くに生えているのは昨日貯鉱庫にも生えていた「ヘビノネコザ」である。ヘビが体を丸めて寝るのに都合がいいのでこの名が付いた。

写真。一番上がコの字型の蘭苔場。二枚目は露頭、銅鉱石を実際に見ることができる。露出している部分は植物が生えていないのですぐに分かる。三枚目が銅山峰にある峰地蔵。皆ここで祈りを捧げた。

大和間符（やまとまぶ）という場所に着いた。昨日も述べたが、坑道のことを間符と呼んでいる。元禄の頃からの古い坑道で、人ひとりが通れるぐらい狭かった。それは画像を見ても何となく分かる。入ることができるみたいだが、正直怪我とかしたら嫌なので遠慮しておいた。

こうしてもう少し山を登って頂上の銅山峰へ到着した。嶺南側の旧別子と嶺北側の新居浜戸を分ける峠で、別名船窪みとも呼ばれる。その由来は嶺北側の新居浜から見て船底のように見えることから。当日は霧がかかっており、銅山峰からはうっすらとしか新居浜市内や瀬戸内海が見られなかったが、天気がいいと新居浜市街や瀬戸内海、四阪島、さらに遠くはしまなみ海道まで見ることができ

る。
　ここには石段と石造りの地蔵、古い卒塔婆がある。峰地蔵と言い、山で行き倒れた人の霊を慰めるために作られた。少し離れた平らな場所には昔、相撲場があり、子供相撲に歓声があがっていた。無事に登りきれたために皆で祈りを捧げた。ここが最終目的地であり、暫く休息して後、元来た道を下った。前述したダイヤモンド水の場所でも休憩を取りながら下山し、車で新居浜南高校へ行き、学生たちと別れて私は河野氏の車で駅へ向かい、駅近くの宿に戻った。

　前述したとおり、日ごろデスクワークが中心の私は、成長途上の高校生たちと登山して、ばてて足手まといにならないか心配したが、そのようなことはなく、高校生たちと同じように登ることができた。二日間彼らと行動を共にしていたが、
皆真面目で、一人説明が終わると皆で拍手をして讃えあっていた。この学生たちのような真面目で好学心あふれる学生生活を羨ましくさえ思えた。是非また新居浜を訪問し、彼らと共に別子銅山の跡地を巡りたいと感じた次第である。
　それからこれも偶然なのか、今年一月三日にＢＳＴＢＳで『百年の計我にあり知られざる明治産業維新リーダー伝』という番組にて、広瀬宰平、伊庭貞剛を中心に明治時代の別子銅山と住友の歴史を放送した。先人たちの偉業のみならず、煙害や鉱夫たちとの対立といった負の部分と、それをいかに解決したかにも焦点が当てられていた。
もう一つ視聴覚資料として『産業遺産紀行　それは歓喜坑から始まった　別子銅山　販売元　株式会社ケー・シー・ワークス　二〇一四年八月』　約二八分がある。今回訪問した場所を含め、別子銅山跡地をくまなく紹介している。アマゾン等にてネットで購入できる。
　更に『邦光史郎　住友王国上・下　集英社文庫　一九八二年版』という三四年前に書かれた、住友開闢から戦後の財閥解体までの気宇壮大な産業小説である。勿論切り上り長兵衛や広瀬宰平・伊庭貞剛等だけでなく、関ケ原の合戦から大塩平八郎の乱、明治維新による混乱等歴史的な記述も充実しており、歴史の勉強にもなるが、通俗小説を狙ったらしく、所々に未成年にはふさわしくない描写があるので、未成年の読者諸兄は十分理解の上で読み進めることとあくまでも小説であることをお含み下さい。

各種データ。

東平歴史資料館。
〒七九二-〇八四六　愛媛県新居浜市立川六五四-三
電話番号　〇八九七-三六-一三〇〇
入館料　無料
開館時間　午前一〇時～午後一七時
休館日　月曜日　一二月から翌年二月まで

マイントピア別子
〒七九二-〇八四六　愛媛県新居浜市立川七〇七-三
電話番号　〇八九七-四三-一八〇一　ＦＡＸ　〇八九七-四三-四〇二〇
入館料　（鉱山観光　鉱山鉄道・観光坑道）
大人一二〇〇円　中・高校生八〇〇円　三歳以上六〇〇円　障がい者割引あり。
団体二〇名以上　大人九六〇円　中・高校生六四〇円　三歳以上四八〇円
団体一〇〇名以上　大人八四〇円　中・高校生五六〇円　三歳以上四二〇円
その他砂金採り体験、端出場と東平を巡るコースの料金もありますので、お問い合わせください。
営業時間　春休み～一〇月　午前九時～一八時　一一月　午前九時～一七時
十二月～春休み　午前一〇時～一七時まで。最終受付は終了の一時間前までです。
ＵＲＬ　http://www.besshi.com

愛媛県立新居浜南高校
〒七九二-〇八三六　愛媛県新居浜市篠葉町一-三二
電話番号　〇八九七-四三-六一九一　ＦＡＸ　〇八九七-四四-七四四七
ＵＲＬ　http://niihamaminami-h.esnet.ed.jp　（ＨＰ内にユネスコ部の活動報告があります。）
ユネスコ部の学生が作った別子銅山専用サイト。
「マインからマインドへ」　http://nmh.hearts.ne.jp/MTM/
「ようこそ　あかがねの里　別子銅山」http://www.besshi.net/hp/menu.htm

参考資料。
『荒俣宏　黄金伝説』集英社　一九九〇年第一刷。
『人物探訪　日本の歴史十四　農商の偉人　暁教育図書　昭和五〇年発行』

『邦光史郎　住友王国上・下　集英社文庫　一九八二年版』
いずれも古い本なので書店での入手不可。一般の図書館や県立図書館で探すかアマゾンで入手してください。
二〇一五年十一月五日の東京新聞の夕刊の「旅」

視聴覚資料。
『産業遺産紀行　それは歓喜坑から始まった　別子銅山　販売元　株式会社ケー・シー・ワークス　二〇一四年八月
ＢＳＴＢＳ新春ドラマ『百年の計我にあり　知られざる明治産業維新リーダー伝』